

# ART ESSAY

アート★エッセイ

## 足もとの土って、 本当に茶色？



栗田 宏一  
(アーティスト)

若い頃、少しお金を貯めてはインドやアフリカを旅していた。そして、ことごとく、だまされ続けていた。ホテルの客引き、タクシー、土産物屋、ほとんどが小銭稼ぎのゲームみたいなものだったが、眠れぬほど悔しかった。そのあたりから、なにかにつけて、人を疑ってみる癖がついてしまった。

そのうちに「これまでに習ってきたことって、本当のことなの？」と、あらゆることやものを疑ってかかるようになってしまった。それならいっそのこと、これまでに得てきた知識や先入観を捨て去ってみたらどうか。しかし、残念ながら、これは口で言うほど簡単なことではない。

この世界の真実を、ひと握りで、しかも説明なしで提示できる表現はないものか。この世界を構成するのは「地・水・火・空」の四大要素。ああでもない、こうでもない模索が始まった。

なんのことはない、ヒントは足もとの土だった。あまりにも見ていなかった。土に触れているうちに、子どもの頃のことを思い出した。「絵を描く時、地面は茶色で塗っていたけど、あれって？」

庭の土、隣の畑、田んぼ、川の向こう、丘の上。手にする土の色は、ひと握りずつ、すべて違っていた。しかも、クレヨンの茶色のような色ではない。ピンクや紫、緑だってある。では、隣の街は？ 隣の県は？ 歩けば歩くほど、違う色の土に出会える。100か所で拾えば、すなわち100色。そのうちに、拾ってきた土の美しさをそのまま提示するインスタレーションを発表するようになった。

「どうして、クレヨンは12色なの？」はたして、12色で、この美しく彩り豊かな世界が描けるだろうか？ ドイツのシュタイナー教育では、子どもに200色あまりの画材を与えるという。「選び取る力」を身につけることが目的だそう。決して、きれいな絵を描くためではない。12色では、選び取る力どころか、持って生まれた色彩感覚まで麻痺させてしまう気がしてならない。

足もとの土ですらこんなにきれいなんだから、きっと、この世界にはもっともっときれいで不思議なことが隠れているに違いない。今は、だまし続けてくれたインド人に、心から感謝している。

(くりた こういち)



作品制作風景  
(フランスにて 2005年)

特集

## 造形教育にしかできないこと

第1回

世界で活躍する日本のアート

### 「カワイイ」文化は 第二のジャポニズムになり得るか

もう、20年以上前から若い女性の間で、フランスの皮革メーカー「ルイ・ヴィトン」のバッグがある種のステータスシンボルとして根強い人気を誇っている。通勤時間帯に山手線などに乗ると、まるでそろいの学生かばんのようにこげ茶色のヴィトンのバッグが目に入ってくる。ところが、数年前からこのバッグの色に変化が見られるようになった。ときどき、10人に1人くらいではあるが、ポップな感じのカラフルなバッグが登場してきたのである。どこかかわいらしく子ども部屋に似合いそうなこのデザインは、日本のアーティスト村上隆氏の作品だそうである。氏は02年にパリのカルティエ現代美術館で「kawaii」展を成功させ「カワイイ」を世界に発信した。いわば「カワイイ文化」の立役者の1人である。今年の元旦に、朝日新聞が『「カワイイ」世界に風』と題した記事を第一面に掲載したので読んだ方も多しことだろう。

同記事によると、日産自動車は昨年10月、村上氏とのコラボレート作品であるカタツムリのようなイメージの次世代車「Pivo」を発表した。日本のアニメや漫画から広がり始めたこの「カワイイ」文化は、今や全世界に広がりそうな勢いである。

これまで日本は、アメリカに次ぐ世界第2番目の経済大国として世界経済をリードしてきた。しかし、この経済成長力は既にかげりを見せており、感性に訴えるものづくり前面に打ち出した文化立国として生きるべき時代が目前に迫ってきている。

もともと日本は小さな島国であり、少ない資源を補うためにその加工技術の高さで発展を続けてきた。トランジスタラジオやウォークマンに象徴される技術力の発信から芸術性のある文化産業を通じた感性の発信へと舵を取ることが今、必要である。

かつて日本の美術がヨーロッパ諸国に大きな影響を与えたジャポニズムのように、感性で世界に発信することができる力を育むために図画工作・美術教育を大切にしたいものである。「カワイイ」文化は第二のジャポニズムになり得るだろうか。

## 「手続きを通した建築」

(Procedural Architecture)

荒川 修作 (コーディネロジスト)

現在、私は自分の職業を、「コーディネロジスト」と呼ぶようにしています。いわゆる科学・芸術・哲学を総合し、その実践を行う仕事です。最近どの国の大学に呼ばれても、現在の私が何者であるかハッキリ位置づけられないのです。なぜなら、20世紀の終わりに科学・芸術・哲学と言われ進められてきたフレーム(枠組み)が、完全に無効になってしまったからなのです。そして、大変な価値の方向転換が始まり、私たちが作り上げてきた人間「Human」(ヒューマン)と呼び使われているコンセプトにも終末が訪れているのです。

過ぎ去った20世紀を見れば、殺し合い、いがみ合い、闘いの連続であり、今だにそれは続いています。人から「人間」という生を見つけ出すためには、まだまだ長い進化が必要です。このような状態の中で、まだ動物のような性質をもった現代のヒューマンからトランス・ヒューマン(死なない生命)に向かうためにはどうすればよいのか。

こんなことを考えながら、私たち人間の行動や目的が何か間違っていたのではないか、いや、ほんとうに間違っていたのだと、ハッキリ分かってきたのです。

そこで、この三つのカテゴリー(科学・芸術・哲学)を総合し、その動きの中から新しいシステムを生み出したのです。そのシステムを使用し、「手続きを通した建築」(Procedural Architecture)という形式を発明したのです。芸術は反復が不可能ですが、この新しいシステムによって反復が可能になるのです。

いずれにしても、この宿命的「死ななければならぬ」ヒューマン(人間)から、一気に進化を我々の手中に収め、トランス・ヒューマン(死なない生命)に向かうのです。

できれば「建築するからだ」(アーキテクチュラルボディ)として進化するのです。

私たちの歴史的知性は、与えられた自然を観察して考え、「精神」とか「意識」などという、まったくアブストラクト(抽象的)な現象をいろいろな言葉で組み上げ、信じて行動してきましたが、私のアイデアは与えられた「自然」(生命)という現象を、体の動きや行為を中心にして、人工的に再構築することから始まっているのです。

世界の政治、経済、社会がこんなにもデタラメで混沌とし、ますます方向性を失いつつある現在、中央に集権されてしまった街や都市の風景が作り出している社会が、いかに人々の創造力や教育、そして健康などを害しているか、最近の子どもや学生の起こす異常な事件や生態を見れば、一目瞭然ですね。

こんな状況の中で、外国に長く住んでいますと、身近に起きる出来事から、私たち日本人のイメージできる「文明」とは何かについて、考えるチャンスがよく与えられるのです。

「文明」(Civilization)という言葉の背後に隠され、消えていったたくさんの出来事の中から、ほんの少しエピソードを探り出して、簡単なイラストレーション(例示)をしてみましょう。

この列島の古代原住民、たとえば初期縄文時代の住民が、暗い、じめじめした洞窟のようなところで、不安な日々を過ごし、生活をしていた状態を想像してください。彼らは長い長い間、眼下に広がる美しい、広々とした場所も見ていたのです。そこでは<sup>どうもう</sup>猛猛な猛獣が自由に暴れまわっていたことも知っていたのです。

ある日、一人の男が、いや女性が(いつの時代もホントに勇気のある行動をするのは女性のようにですね)家族のことを想いながら、眼下に横たわっている川へ、水を汲みにいく決心をしたのです。多くの種族が驚き、それでもその女性の「武装」を

助けながら、引きとどまるよう話し合います。

おそらく、このときです! 共同性に向かう感情が芽生え始めたのは。

彼女たちは、竹やりや骨でできた刀などを持って、山を降りていきましたが、もちろん帰っては来ませんでした。

この後、天災や猛獣らとの血みどろの戦いが続き、何十億という命が消えていったのです。今だに彼らがどこから来たのか、その性質についてさえほとんど何ひとつ知ることができません。とにかく、何千年も過ぎ、やっと一時的にせよ、夢にまで見た広大な場所を勝ち取ったのです。

そして、彼らは場所の一部を生活の場に変えるため、建設を始めたのです。不安の中から生命を守り、共同の生活が営める場所を、獲得していったのです。

「建築する」という共同性に向かう働きと、共同体としての都市化が始まったのです。まったくシンプルなイラストレーションですが、都市化に向け「建築する」という共同の意思や力が、文明(Civilization)の構築への始まりだったのでしょうか。

大変不幸にして、現在の日本には、いや日本人には、およそ都市化に向かう力や共同体としての意思は全く見受けられません。このような感性や性質は、今始まったのではなく、何百年も昔からつくられ、受け継がれてきたのです。

我々日本人はこの世では「仮の宿」か、「仮の姿」で生きることが美徳とされてきたのです。どうアガイトも、ほんのつかの間しか生きられない、いずれは大地に「オサマル」から、大地、いやお墓、墓地、いや土地、「不動産」、いや「不動産屋」になろうと決心したところが見受けられますね。そのために、健康に気をつけ、学問を身につけ、一生懸命に働き、欧米の人々からエコノミカル・アニマルと呼ばれても何も気にしない、という島国特有の感性を大切にしてきたのです。

その反面、こんな事実もあります。

数年前にグッケンハイム美術館で開かれた私たちの展示会のオープニングに、中国の長春(昔の満州)から市長以下、数名の方々が来られ、私を長春へ呼んでくださったことがあります。私は旧満州の街を歩き、体験して驚きました。壮大な都市の建築が80年ほど前から始まっていて、それらはす

べて日本人が計画したそうです。他国の土地では可能なのです。この分裂した知性や情熱を、もう一度取り戻すことができないか。不動産屋さんの気質や性質を捨てれば可能でしょう。

戦後も半世紀以上過ぎ、世界における経済戦争にもまあまあ勝ち抜き、今や経済では世界の1、2にランキングされるようになった経済大国日本は、21世紀の初めに新しい文明都市を建設できるほとんど唯一の国であり、それをもっとも必要としているのです。

歴史的に見て、どの国も経済戦争に勝ち進めば、そのお返しとして新しい文明としての街や都市を建設し、その時代の芸術・科学・哲学を総合し、その時代に生きた人々の呼吸が感じられる場所として次の世代にバトンタッチしています。それが、地球上に生きている人間としてのエチケットなのです。

ところが現在の東京、名古屋、大阪の町を見てもみましょう。日常の生活の場は、デタラメにまざしく、もうメチャクチャな風景の連続、一体現在の日本人は人工的につくられた環境と呼ばれている場所の、「環境」という言葉の内容だけでも真剣に、考えたことがあるだろうか? と思ってしまいます。共同性を少しでも持ち合わせた人が、この街に住んでいる、そのことが奇跡です。

どこから見ても眺めても、あの水汲みに出かけた縄文の女性や、その武装を助けた人々を想像することは不可能です。臆病で無体系、無思想の代償ですね。いつの時代にも、新しい街や都市を建設すれば、自ずとその時代の死生観が生まれるものです。それこそが行動を伴った思想と呼ぶ現象です。戦後の日本人は、一度でもそのような死生観を持ち合わせたことがあるのでしょうか。もうこうなれば「手続きを通した建築革命」という産業を起こし、この四つの列島を徹頭徹尾理想の町に変えていくしかありません。そのことが日本の21世紀の産業となり、夢を生んでいくことでしょう。

欧米から、いやお隣の中国から昔々輸入された声を現在も信用し、真の都市化が進まなかった我が国では全部を一度に変えることはできません。まず常識や気質、性質を変えられるような制度や

体制の中から少しずつ始めるのです。

私たちが岡山県の奈義町、岐阜県の養老町、ニューヨークのイーストハンプトンで始めた、一連の「手続きを通した建築革命」は、国や県の定めた法律や制度に異議を申し立て、それらの法律や制度がいかに現実の生活に関係なくつくられたものであるかを、まず人々の日常の身体を経験によって理解するための道具や用具として建設されたのです。

つまり、日本人が長い間使用してきた法律・制度・言語・形態などから少しでも意識的に離れようと心がけたのです。それらどの一部でも、使用の仕方が変わり、常識やモラルを覆すことになるのです。そして覆してみたら以外に「楽しく」「自由に」使え、驚くでしょう。そこで初めて自由の意味を楽しみの中から見つけ出し、知ることができます。これは発見であり発明なのです。革命に向かうとは、このようなささいな行動を言うのでしょうか。非常識の実践ということなのです。

今、この場所を経験した人々が、これらの現象に興味や情熱を持ち、一体この出来事は何だろうと真剣に考え始めたのです。非常識の場所が楽しく、しかも新しい経験から知る知的スリル、全くいままでとは違った「コウキシン」が芽生え始め、常識が変わり始めたのです。

ここで、私たちが長い間考え、構築し、行動に移しながら進めてきた、反復不可能といわれ、またそのように信じられてきた事実を可能にするための芸術的直感を、ほんの少し、エピソードをまじえ、テレグラフィックに(要点をかいつまんで)お話ししましょう。

「死なないために」とか「宿命反転都市」という言葉をプロナウンス(表明)したとき、世界の誰でも不信感を表します。不可能なことを可能に推し進めるためには、あらゆる常識(コモンセンス)を固定させないように道徳を日常の行為や、行動の中から変えていくことです。すると、少しずつ、あの、不動と思っていた倫理が動き始めるのです。「倫理」という言葉を、私たち日本人は与えられた「モノ」や「出来事」のように考えている種族ですね。倫理とは私たちの生のように毎秒生成変化しているのです。

私が芸術家としてニューヨークへ渡った頃は、芸術や哲学の終わりが語られ、人間というコンセプトも終末に来ているとサケバレていた時代です。そんな雰囲気の中で、私と数名の友人と共同で「意味の形成」の手続きを言葉で行うだけでなく、あらゆるサイン、そして身体の動きや行為も使い、芸術的アイデアをシステムを通じて行う方法を考えることから始めたのです。いわゆる芸術的直感を反復可能にするためのコンゲンテキな意味の解体を始めたのです。

十数年して欧米の美術館が(このころはまだ芸術作品として認められていました)この大きなパネル84点を展覧し始めたところ、数名の科学者、哲学者が大変興味を示し、その年(1971)あの有名な物理学者ハイゼンベルク氏が推薦し、ミュンヘンの出版社から『意味のメカニズム』として出版するという運びとなったのです。そして、1年間ベルリンの自由大学へ招待して下さったのです。これは大変なイベントを起こし、私たちはインスタントに有名になりました。

私がひとつラッキーだったのは、意味の形成の手続きを言葉だけでなく、有機体としての身体を中心に考えたことだったのです。あれから30数年が過ぎ、このころは『意味のメカニズム』が世界の数学者のバイブルになりつつあると知らされ、大変驚いています。

ちょうどその頃から、ニューヨークの郊外に大きな場所を借り、身体の動きを中心とした実験を始めたのです。最近の言葉で言えば生態心理学とか認知科学のような領域です。生命の多様性を観察するのではなく、外在可能な生命を建築しようとして決心したのです。このような自由な実験をこんなに長くここまで進めてこれた理由は、世界の数人(アメリカ、フランス、ドイツ、日本)の方々、私たちのために小さな財団(アーキテクチュラル・ボディ・リサーチ・ファンデーション)を設立して下さったからなのです。その後、イタリア、スイス、カナダからも援助が入り、やっと今日まで実験を続けてこられたのです。

この実験の中から生まれたコンセプトの一つが「手続きを通した建築」(Procedural Architecture)だったのです。このコンセプトを使用し、たくさんの計画を進めてきました。フランスのエピナー

ル、東京都臨海副都心、ベニスのマドンナ・デ・ラ・モンテ、沖縄の米軍基地の跡、東京の勝鬃橋、養老天命反転都市…まだまだいろいろあります。

私たちが現在持ち歩いている、この有機体の身体は、35億~40億年という長い進化の時間を通して、生成されています。その今だ続いている進化を、人工的に一気に進めるための、「手続きを通した建築」なのです。

いずれ近未来(私たちの時代)に、トランス・ヒューマンと呼ばれるであろう生命がどんなものか、何なのか、その現象を体験されたい方は、ぜひ岡山県の奈義町現代美術館に足を運んでください。そこでは不思議な名前をつけられて静かに人々を待っている「偏在の場・奈義の龍安寺・建築するからだ」さんがいます。そのうち、普通の人の名前に変えてやるつもりです。それは10年ほど前に、静かに地球上に現れた初めてのトランス・ヒューマンです。この現象は専門家の方々だけでなく、誰でも体験できるのです。

この体験を通し、2002年にアメリカの大学から『Architectural Body』(建築するからだ)が出版されたのです。この動きはモノスゴイ速さで歴史を変えていくと私は信じています。いよいよ身体を武器として、永遠を垣間見ようとする、壮大な計画が動き始めたのです。

これでお分かりのようにこのコンセプトは、欧米の「意識」や「精神」を「身体的行為」に置き換えることから始まったのです。ちょっと見たところ、普通の住宅か街に見える建物や風景は、その中で住み、暮らす人々のからだの動きや行為から一瞬一瞬、生成変化が始まるのです。



三鷹天命反転住宅(メモリーオブヘレンケラー) 2003~05



三鷹天命反転住宅(メモリーオブヘレンケラー)の内部の様子

その中から生まれ出現してくる「偏在としての環境」を切り開きながら、切り閉じて降り立ってゆく感覚や視覚、知覚としての場が形成されるのです。その「間接的に形成された場」をいかにコントロールし、それ自身の動きと私たちのからだとの動きによって生まれるイベントから不連続の境界が生じ、その生成しつつある境界を連続可能な場に保つのです。そして今まで「意識」と言われ使われていた現象や言葉の働きの構造を組み替え、人工的に作り上げた道具か用具のように私たちの住宅も環境も建設されるのです。だから何百年も前からつくられている建物や街、それから20世紀のモダニズム建築やアーキテクチャーとは全く違った意味を持っています。いずれは倫理的メジャメント(指標)にもなっていくでしょう。そこで働き、また住むことによって、誰もが今までとは全く違った希望や自由に向かった生活が始まるのです。そこでは日ごと、大小不思議な出来事が起こり、交わり、降り立ち、人々がトランス・ヒューマンを体験し、神様になっていくのです。

現在の日本の人々が動き出せば、いずれは世界の人々が「建築するからだ」を体験するために日本にゾクゾクとやって来るでしょう。私たちの生きている時代に一日も早く実現させるための「手続きを通した建築革命」なのです。

(あらかわ しゅうさく)

(この文章は、2003年に行われた名古屋大学建築学科創設40周年記念講演の内容を再編集したものです。)

# 大地に残された宝物

～南アフリカ共和国 ヨハネスブルグ日本人学校での経験を通して～

東京都江東区立大島中央小学校 内野 薫

## 1. はじめに

南アフリカ共和国、まだまだ日本には知られていない国である。広大なアフリカ大陸の最南端に位置するこの国は、アパルトヘイト(人種隔離政策)で世界的に問題になった国でもある。しかし、この人種隔離政策も1991年に廃止され、現在は、黒人の人々と白人の人々、アジア系の人々と世界中のあらゆる国の人々が共存している国になっている。私の赴任したヨハネスブルグ日本人学校は、首都プレトリアの近く、ヨハネスブルグの大都市の中にある。大都市とはいえず車で1時間ほどの周囲は、家一軒もない広大なアフリカの大地に囲まれている。日本から遙か彼方、この南半球の大地に、平成14年4月7日、私は到着した。そして、世界の人々と共存する3年間の日々がスタートした。英語という共通語を意志伝達の基本とし、生活に学習にコミュニケーションをとっている。自分の意志が伝わらない場合は、身振り手振りで強引に伝えていく。コミュニケーションのポイントは、相手の目をしっかり見ること、笑顔ではないかと思う。諸外国の方々の初めての出会いの挨拶などには、実に感情が溢れているように感じた。

## 2. 描くことへの意識

私は、図画工作・美術を専門として、日本で教師を勤めてきたが、子どもたちの絵を描くことへの苦手意識が年々強くなってきているように思う。私が、東京都教育研究所の美術研究室で教育研究員をしていたときに、幼児期からの描画の表現と幼児の心理面の発達とを比較・研究したことがある。幼児は、生まれてから後、周囲の環境を全身で認識していく。音、言葉、もの、恐怖、楽しさ、空腹、痛み、暑さ、寒さ等々。幼児期の子どもの成長は、その周囲の環境により大きく異なり、

その環境は、子どもの情緒に多大な影響を与える。言葉の発達とともに、身近なものを口に入れたりなめたりしながら、認識していく過程の中で、徐々にクレヨンなどの持ちやすいもので「なぐり描き」の世界がスタートする。

この「なぐり描き」の時期は、誰(親や教師)が教えることなく、言葉を話し始めるようにスタートする。しかし、この段階が言葉でも絵画でも同様に、周囲の環境が重要であると思う。手や周囲を汚してしまったり、クレヨンを何本も折ったり、また使ってしまうことに対して強く注意をしてしまうことが、その表現を否定してしまう恐れがある。また、何が描いてあるのか何度も問いただしたり、何が描いてあるのか理解できない大人が、「ここはこう描きなさい」と命令に近い指示をしてしまうことで、自由な表現が取り上げられてしまう。幼い頃の描画に対するつまずきがあった小学生や中学生、また絵を描くことに楽しさを感じられない子どもたちに、改めて絵を描くことの楽しさを感じさせたい。人間の原点に返って自然に描く楽しさの中から、自己表現ができる子どもたちを育てたいと思う。

## 3. 現地校の教科書から

現地校に通う子どもたちの授業を見学させていただいたことがある。学校のシステムは日本とは



Arts & Culture 5年生の教科書

異なる点が多く感じられた。美術の教科書の中身も、日本の図画工作や美術とはかなりの違いがある。教科書のタイトルからも分かるように、「美術と文化」という内容で構成されている。写真はGrade 5、ほぼ日本の小学5年生に相当する学年の教科書である。その中に、南アフリカの文化からロックアートが取り上げられていた。残念ながら、現地校でこの題材の授業は見学できなかったが、他の題材でも、楽しそうにのびのびと絵を描いている子どもが多く見られた。

## 4. ロックアートより学ぶ

ヨハネスブルグの北西35kmほどのところに、スタークフォンテンという名前の洞窟がある。ここでは、約200万年前の類人猿アウストラロピテクス・アフリカヌスの女性の頭蓋骨「Mrs. Ples」が発見されている。そして、この大都市を取り囲む奇妙な形をした山々の中に、私も写真集でしか見たことのないサン族の描いたロックアートが無数に存在している。この世界的な文化と歴史の財産の中で、子どもの自己表現を考えたとき、絵画の原点「ロックアート」から学ばせたいと強く感じた。



南アフリカ サン族によるロックアート

〈小学部3・4年生を対象とした授業研究より〉  
描画の基盤は、実際は岩に描いているが、図工室での可能性とリサイクルの学習を進めていた



日本人学校図工室 ロックアート授業風景より

め、卵のパックをちぎって紙を再利用し、岩に近づけた堅いごつごつした画面づくりからスタートした。紙づくりの段階では、子どもたちにロックアートの写真集や、描いた人々の歴史を説明した。また、校外学習では近くにある大学の研究室でロックアートについての学習をする機会を得ることができた。



ヴィツ大学ロックアート研究室にて学習風景

研究室での学習の中では、南アフリカにおけるロックアートは、ブッシュマンと現在日常的に呼ばれている人々のものであるが、このブッシュマンという呼び方は、昔南アフリカ共和国を植民地としたイギリスやオランダの人々が、以前よりこの地に住むサン族がブッシュのなかで裸で生活をしているのを見て差別的に呼んだことが始まりという説明を受けた。

また、各地にある本物のロックアートに出会ったときの鑑賞のマナーについても教えていただいた。図工室での授業では、これらの学習を生かしながら、自然の中からの描画材の収集として、まず筆づくりからスタートした。子どもたちの興味関心は大変高く、絵を描くことに夢中になる姿が見られた。

## 5. 終わりに

昔、日本でも、道路に蠟石で子どもたちは自由に絵を描いたり、空き地や公園などで絵を描いたりする姿が多く見られた。子どもは遊びの中で、身近な生活空間を画面に、自己表現していた。なぜ、絵を描くことが好きでない子どもたちが増えてしまっているのだろう。これからは人間の原点に返り、素朴さを大切にしたいと考えている。(うちの かおる)

# 「造形遊び」を世界に

世界に通用する日本の美術教育はあるか

「美育文化」編集長 穴澤 秀隆

## 世界で活躍する二ホンの美術教育？

「世界で活躍する日本のアート」というのがこの号のテーマだと聞いた。さすがに、一時期は開催すら危ぶまれていた横浜トリエンナーレ2005を総合ディレクターとしてまずまず成功させた川俣正について書けばいいのか。あるいは、去年の春に、ニューヨークのジャパン・ソサイティ・ギャラリーをオタクアートのフィギュアで埋め尽くした村上隆の山羊ヒゲが思い浮かんだりする。でもでも、これはアートシーンのお話、本誌の目論むところであるまい。ここはあくまで、二ホンの美術教育にすべらせて考えていきたい。さて、そう思って「世界で活躍する二ホンの美術教育」という看板に、よっこらすげ替えてみたが、あれれ、肝心の商品は何を並べたらいいんだろう…。

## 日本発の現代美術はあったか

戦後60年、この国の経済がいつとき世界レベルにのし上がったことは誰でも知ってる。けれどもその一方、日本から発信された新しい芸術や思想はあったのかとよく問われる。例えば、一見華やかに見えた現代美術のムーブメントとして、そういうものはなかったのだろうか。

「もの派があったじゃないか」「ネオダダだって…」という意見が出てくるかも。まあね…。反芸術、身体性、ハプニング…、それらのスリリングな理念を、組織的に展開した点で、これらの運動が世界に先駆けたものだったという見方は、なるほど。

しかし、ニューヨークのいたずら小僧やフリークにすぎなかったポップアートや抽象表現主義が、人々の暮らしやメンタリティにがっちり浸透し、堂々たる体躯の大人に成長して、「世界の美術」として認められていったのとは、残念、レベルがち

がう。もの派もネオダダも、結局は極東の小島の美術界の出来事、文化祭の騒乱にすぎなかったのではないか。未だに二ホンから世界に通用するロックスターが登場していないこともこれと同じ。

戦後の二ホンが生み出した文化や思想のなかで、世界に通用するものは、やはりなかったのか？ そう思って再度首をめぐらしたとき、埃にまみれながらキラリ光っている石がひとつあった。

唐突に思われるかもしれないが、私はそれを「憲法」と思う。もちろん9条、平和主義。

これこそ当時、世界のどの国も持ちえなかった清新・崇高な理念であり、その後の冷戦構造において独自の位置を占める可能性を持っていた気がする。つまり世界をリードすることができたはず。戦後の日本は、「これで行こう」と一旦は決意したはずだったのに…。あーあ、その末路はご承知の通り。

## 輸出されている指導要領体制

さて、美術教育の構造もこれと似ている。戦後の出発を高らかに謳い上げたのは、もちろん創造美育協会の運動だろう。だが、高度成長の入口でその活動はしぼんでしまう。ただし、これは創美の理念が消滅したのではなく、手際よく換骨奪胎され、指導要領体制に組み込まれていったのであり、デザイン教育もこれと似た経緯をたどった。

こうして図工・美術教育においても、世界にまれにみる完成度を誇る学習指導要領のシステムが完成された。ここには学校建設、教員養成や配置など「優秀な」教育行政のバックアップがあったことはもちろん。これが高度成長期の図工・美術教育の見取り図だ。

ところで、安定成長の時代になり、経済摩擦の緩和策としてODAの必要性が指摘されるようになった。そこで、例えばアセアン諸国で、道路や

ダムづくりが、だんだん推進されるようなことが起こったが、これはやがて「ゼネコンを太らせただけ」という批判に晒され、文化ODA、とりわけ教育ODAという柔軟戦略が導入されていく。ただし、これも当初は、校舎や体育館のような「箱もの行政」であり、同工異曲であったため、教員養成や指導要領の作成というシステム開発が求められることになった。そこで輸出品として注目されたのが、優良ソフトとしての二ホンの学習指導要領であった。事実、インドネシアやシンガポールのシラバス(指導要領)開発には、文部省(当時)が援助を行った経緯がある。強いて言うなら、これが公式面での日本の美術教育の世界貢献ということになる。ただ、ここにはスポーツイベントに協賛してがっばり自社製品を売りつけるメーカーのような、なーんだか不実な匂いが漂っている。

## 『トンギコ』から広がった文化交流

文化交流というものは、やはり民間主導でいくべき、これが鉄則だという気がする。

2004年に初公開された野中真理子監督のドキュメンタリー映画『トントンギコ図工の時間』(朝鮮語字幕)が昨年秋、韓国・ソウルで上映された。もともと、これは日韓外交正常化40周年を記念した「日韓子ども文化交流事業」の一環として行われたものだが、そのきっかけとなったのは、あくまでも民間レベルの教師の交流だった。

他方、これに先立ち、『トンギコ』(英語字幕版)が水島尚喜氏(聖心女子大学)により、2004年3月に米国オハイオ州立大学で上映されている。内野、水島両氏の報告(註1・2)を読むとき、そこに共通して立ち現れてくる視点があった。それは何か、最後に書く。



韓国・ソウルでの上映風景(2004年10月/写真提供:内野務氏)



米国・オハイオ州立大学での上映風景(2004年3月/写真提供:水島尚喜氏)

## 「造形遊び」を世界に

映画『トントンギコ図工の時間』の主題を一語で言うなら「子どもの創造力の再発見」だろう。これはいかにも陳腐な理解に思えるが、それゆえ根源性をもっている。内野氏も水島氏も、それぞれ『トンギコ』にすんなり共感した人たちの反応を伝えているが、それはおそらく子どもの創造活動が世界の人々に共通の記憶を呼び覚ますためだろう。

文化遺産である「美術」は、カルチャーの差異に依存する。それに対し、概念としての「子ども」は共通性を根拠とする。

この後者にどっしり依拠して、そのような根源性を持ち、幼児も、高齢者も、障害のある人、ない人、外国の人…、つまりあらゆる人を対象とし、その身体性に基つき、素材、即ち世界との接触、環境との関わりを企図し、技術の巧拙を問わない、そして何より、日本で生まれ、しかも公教育のシステムにもしっかりと組み込まれ公認されている、そんな図工教育の活動が — あったではないか — 「造形遊び」という。

「日本国憲法と造形遊び」、たどん(炭団)とガンモドキほどに脈絡がない。でも、そうではないことを説明したつもりだ。ようやくにして、冒頭の当惑に応えたマーケティングポリシーと主力商品が見つかったようだ。いろいろの困難は覚悟の上、これを世界に誇れるものとして広げることにはできないものか、本気でそう思うのだが、皆さんは如何？ (あなざわ ひでたか)

註1:「美育文化」2006年1月号、「韓国図工交流2005夏秋—海峽を渡った『トントンギコ図工の時間』—」、内野務(品川区立第三日野小学校)

註2:「トンギコ新聞」2004年4月1日号、「トントンギコ図工の時間」製作上映委員会、水島尚喜(聖心女子大学)

# 子どもの椅子

FROM

兵庫県宝塚市立長尾台小学校  
仲 清人



最近の子どもたちは、「ジコチュー」だとか、「学びから逃走している」などと言われている。実際、図工室にやってくる子どもたちを見て、うん、親や社会が変わったからなあ、と肯定したり、いや、昔から子どもは変わっていないぞ、と否定したりしている。しかし、一人ひとりの生の子どもと向き合うとそん

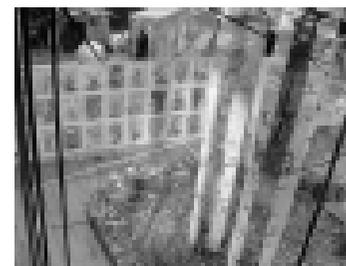
な子ども論は宙に浮いてしまう。ただ「受験」や「学力」というものが子どもの背中に重くのしかかっていることだけはなんとなく感じ取れる。高学年になると、図工なんかよりも国語や算数を、ということで、中には息抜き気分で図工の授業にやってくるような子どもも現れてくる。そんな中で図工専科の僕は、

図工やってるといろいろなイメージが湧いてくるし楽しい、図工の時間が待ち遠しいなどと子どもたちが言うような授業をやりたいと常日頃願っているのだが、悲喜こもごもである。

宝塚市では図工展を1年おきにやっていて、今年度は図工展の年に当たる。予定は11月。この図工展で子どもや親を惹き付けてみよう、美術(アート)ってこんなに素晴らしいんだと気づいてもらおう、と考え半年前から計画を練った。テーマは「生命-いのち-」。昨今の命軽視の風潮の中、美術(アート)を通して、「生命」を子どもや保護者たちに考えてもらい、命の大切さを伝えたいと思った。例えば4

年生では、体育館の裏に一昨年の台風で倒れた1本の木があったので、それを材料に立体作品「動物ランド」をつくった。それから何か月か経つと、その横倒しの切り株からなんと芽が出ているではないか。子どもたちは倒れている、しかも自分たちが切り刻んだ木から「生命」を学んだのだ。図工展では「動物ランド」や平面作品「春、ステ木」、5メートル程の共同作品「のびろのびろ」に囲まれた床スペース一面に枯れ葉を敷き詰め、参観者にそこを歩いてもらった。枯れ葉のいい匂いとカサコン鳴る音と…。

今回は会場を一つの生命体の胎内として、それぞれの学年が



作品に囲まれた落ち葉の広場

小テーマのもとに展示した。5年生は総合学習で「生命の歴史」を学習した際のアートの的なものも展示した。地域の現代美術作家の方にも、当日の作品展示や事前のワークショップをしてもらったりもした。

図工展が近づくにつれて、子どもたちは「わたしらの図工展はスゴイよ。ぜったい見に来てよ！」などと親に伝えるように

なった。親の感想では、「子どもたちの作品を見ていると、涙が出てきました」と言う方までいた。子どもも大人もホンマモンには心を動かすのだなあ、目的は達せられたと思った。こちらが子どもたちに伝えたいものがあって、それらに熱を入れ、十分な計画を立てて遂行すれば願いが叶うものだとこのときほど思ったことはない。

図工展「生命」の取り組みを通して分かったのは、今何を子どもたちに伝えたいかを考え、それを実践することがいかに大切であるか、ということである。しんどかったが喜びの多いやりがいのある図工展であった。

(なか きよひと)

## 図工室

## 美術室

「楽しくなければ図工じゃない!」この信念のもとに、これまで授業づくりを行ってきた。ここで言う楽しさとは、本質的な楽しさであり、形や色、材質感などへのこだわりから生まれるものである。

今年度私は、新採以来20年ぶりに1年生を担当している。20年前とは、子どもたちの考え方や経験、価値観なども大きく変化している。中でも、人と関わるのが苦手な子どもたちが何と多いことか。しかし、美しいものやおもしろいものに素直に感動できる心だけは、変わっていないような気がした。

そこで、造形遊びをたくさん経験させながら、心を育てていきたいと考えた。「ならべてあそ

### 心地よい“造形空間”を楽しむ

大澤 哲夫(山形県山形市立第四小学校)

ぼう!、「つんでつないで…」、「へんし〜ん、マイルーム」など、たくさんの活動を楽しんできている。

11月には、体育館いっぱい、街をつかって楽しんだ。資源回収で見つけた箱や生活科の学習で集めた落ち葉、それにふだんから蓄えている身近材などを使ってつくるのである。はじめは自分の街づくりを楽しむ。そのうちに街が広がり、自然に友だちの街とつながっていく。そして最後には、体育館いっぱい「ぼくらの街」が完成した。

「ぼくたちの氷の街。ここの川が青く凍ってるでしょ。けい子ちゃんのタワーともつながってるよ」

「私はひなたちゃんとあらた君と一緒に、お菓子の街をつかったんだよ。落ち葉の甘いにおいもするよ」

目を輝かせながら、生き生きと活動する子どもたち。自然な関わり合いやつながりが、心地よい造形空間として広がっていた。「造形活動って、ほんとに楽しいね!」一番喜んでいただのは、私自身だったかもしれない。

(おおさわ てつお)

### 私にとっての「これから」

馬場 正邦(長崎県諫早市立北諫早中学校)

「美術科の授業時数縮減が現実となった今、教職歴の折り返し地点を過ぎた私にとっての課題は?」、「振り返ってみると美術教師として私はいったい何をしてきたのだろうか?」、「美術科の危機を唱えるだけで本当に美術教育の使命を果たしてきたのだろうか?」という思いから、私は平成14年度の新学期指導要領実施に伴う絶対評価のための基準設定や年間指導計画の見直しに取り組んできた。このような実践の結果、教師(私)自身に適度な緊張感と余裕が生まれ、

少しは生徒の思いやそこに発揮されている資質や能力を読み取れるようになり、一人ひとりの生徒の活動状況に応じた柔軟な指導ができるようになった。また、生徒たちも美術科に対する意識が少しずつ変化し、授業中の私語が少なくなり制作に集中するようになったり、校内に展示している全校生徒の作品を見ながら「自分たちもやってみたい」、「先生、来年もこれやるの?」、「僕だったらこんなふうにつくってみたい」という声が聞かれるようになった。生徒の

意識の変化に伴って、教師(私)自身、予想を超えた生徒作品にハッとさせられることが多くなったような感じがしている。今、本校で担当している全校生徒の8割が「自分を自由に表現できるから美術の時間は楽しい」と答えている。教師(私)自身が生徒を一定の価値基準に照らして見るのではなく、生徒一人ひとりがどのような力を発揮しているかを適切に評価し、よさを認め、生徒一人ひとりが自己表現の自信と喜びを味わい、目がキラキラと輝く授業を目指して今後も日々研鑽していきたい。いつの日か、一人でも多くの生徒たちが美術を愛好するきっかけをつかんでくれることを信じながら…。 (ばば まさくに)

# メタリックな仮面のオブジェ

## ～アフリカンアートの鑑賞を表現活動へ・ さらに展示を考えた発展的表現と相互鑑賞～(6年生)

東京都調布市立第三小学校 福岡 貴彦

### 1. はじめに

「なぜアフリカンアート？」

人が生み出してきた様々な芸術のなかでも、アフリカの民族美術などが持つプリミティブ(原始的)な感性と無垢な子どもが持つ感性は、それらの根底において通じ合うものがある。



バミレケ族の仮面(木 高さ30cm カメルーン アフリカン・アート・ギャラリー収蔵品)

アフリカの美術が20世紀の美術に対して決定的な影響を与えた事実は有名であるにもかかわらず、学校教育の鑑賞の舞台では意外になじみが薄い。しかし、その造形の単純明快さや直截的な表現は子どもがもっとも得意とするところでもある。その造形物は、子どもの鑑賞教材としての適性が高いと言える。そして、その親しみの持てる感動を自分の表現につなげ、さらに次の段階の相互鑑賞に発展させるのが、今回の活動である。

### 2. 活動の流れ

i) インターネットを用い、アフリカンアートと呼ばれる色々な造形物を鑑賞する

画像による間接的な鑑賞活動は、現物を見てリアルに体感するのと比較すると、子どもが受ける感動は当然制限される。それは、同じ旋律をコンピュータ制御された電子音で聴くことと、生の楽

器演奏で直に聴くこととの違いに通ずる。芸術の分野では特に、便利だからといって文明の利器に過剰に期待することには注意を要する。もちろん、近くにそれらを展示してある美術館などがあり実物に出会うチャンスがあるのならその必要はないのだが。ともあれ、この活動はこれから展開される造形活動の契機としての鑑賞であるため、画像や紙面からそれらの仮面の大きな特徴を感じ取り、アフリカのアーティストたちが持つ造形に対する自由な精神を伺い見るまでにとどめたい。他の教科の学習にも言えることでもあるが、子どもがインターネットで検索しながら適切なものにヒットするのを待つことや、サイトの文章や画像をそのままプリントアウトまたは丸写しすることには、それほど意義もないし時間を費やすのも惜しい。パソコンリテラシー(パソコンで読み書きする能力)が必要ならば、是非図工以外の時間で高めてほしい。ここでは、指導者があらかじめ鑑賞できるサイトの候補を検索し決めておくことよ。

ii) 仮面を制作する

自分たちと身近である、と感じることのできるアフリカンアートの鑑賞によって、子どもたちは自らの制作に対する意欲を高めることができる。鑑賞を契機とした制作活動である。

準備するもの：

軽量紙粘土と呼ばれるもの(商品名「スーパーカルモ」など)、粘土棒、粘土べら各種、芯に使うアルミ線(φ1.5～2mm) 軽い身辺材料など

アフリカ人の自由な感性に触発され自分の感じたまの好きな形を想像してみる。概念としての「仮面」とは関係なく、平面的または立体的なもの、着用できるよう目に穴をあけたり目の代わりに雑材を埋め込んだりなど、思うままにつくらせ

たい。最近の軽量粘土は可塑性や強度においてかなりの進歩が見られ、子どもの願いにかなった複雑な形を形成することが可能になっている。さらに、芯材としてアルミ線を使えばどんな形でもできると言っても過言ではない。また細かい細工を施すこともでき、スタンピングなどの技法でテクスチャー(表面の質感)も自由につけられるので、子どもの思いを形にするには非常に便利な表現材料と言える。今後の活動を見通して、アルミ線を中心につくり上げるオブジェの「接合点」を意識させ、突き刺せるように粘土を盛り上げたり、アルミ線でくくれるように穴をあけたりなどそれぞれ工夫させたい。

iii) 「仮面」を生かしたオブジェづくり

ここでは、展覧会に向けて自分の仮面をいかに効果的にアルミ線やアルミホイルなどを使って表現できるか、素材と向き合う。仮面はアルミ線などのメタリックな素材と質感的に調和するように銀色に塗っておく。銀色のアクリル塗料などが扱いやすい。スプレーラッカーの銀を使用する場合は、児童が塗料やガスを吸い込まないように、十分な換気やマスクの装着など徹底した対策を施した上で活動させる。



人型の児童作品

人物や動物などの生き物の形や、タワーや遊具などの建築物のような形など、それぞれ自由な表現を保障する。いずれにしても、アルミ線の末端を固定することで、思うような造形がストレスなく進められるように台座を使いたい。今回はツーバイフォー建築の廃材を地域から調達できたのでそれを活用した。台座として適当な大きさに切った廃材に、アルミ線の径にあった穴をあけ、そこに

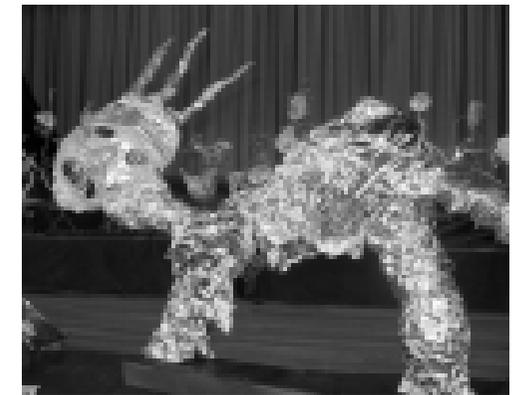
基礎となる太めの線(φ3～4mm)を突き刺すようにすると造形が容易に立ち上がる。アルミ線などで立体的に表現しながら仮面も自分の思いで組み込んでいく。

準備するもの：

各種アルミ線(φ1.5～4mm)、アルミホイル、身辺材料、台座(廃材など)、道具類(ペンチ、金づち、金床、ハンドドリルまたはボール盤など)

iv) 校内展覧会での相互鑑賞

完成した作品を一堂に集め展示する。展覧会は特殊な状況ではあるが、そこを目的に「見せる」ことを意識した造形活動を展開するにはよい機会と言える。自分の思いや気持ちを他者に対していかに表現するか、お互いのよさをどう発見し合えるかを、造形を介したコミュニケーションの場として有意義に活用したい。



動物の形をした児童作品

### 3. おわりに

鑑賞活動を通して、すべての子どもに既成概念を飛び越え直接体で感じ、心よりもまだ深遠な部分を揺さぶられる感覚を味わってもらいたい。それが容易に実現できるのも子どもであると思う。また、それは直に表現活動への意欲に作用し、連鎖するものだと願う。我々指導者は、指導の容易さから教養主義的鑑賞や技術解説的鑑賞に陥りがちになっていないかと留意するとともに、子どもの内面に迫り表現につながるることのできる「本質的鑑賞」を常に意識していきたい。

(ふくおか たかひこ)

# 3年間の振り返って 「思い出の場面をつくる」

神奈川県横浜市立岡野中学校 川島 芳子

## 1. はじめに

中学3年生の後半は義務教育のまとめの時期でもあり、また、新しい生活に巣立っていく時でもあるため、生徒も教師も結構忙しい。日々の慌ただしさに追われ、気がついたら卒業だったでは少し悲しすぎる。3年間の振り返り、思い出したり懐かしんだりしながら毎日を大切に過ごして卒業式を迎えられる教材とは何か、を考えた。

「思い出の場面をつくる」は、「3年間の思い出で一番印象に残っている場面を立体でつくろう」というものである。3年間の集大成として大作をつくりたいという気もするが、美術の授業は週1時間であるため、そうたくさんの時間はかけられない。今回は作品の土台の部分をかかなり小さくして、生徒の負担を少なくし、予定の時間内で誰もが作品を完成できるように工夫した。その結果、15×12cmの小さな土台の上に粘土で形をつくっていくことにした。昨年は台の大きさが22×22cmだったために、時間もかかり大変だった。しかし、少々小さいほうが無理せず凝縮された作品がつく



「びわ日和」生徒作品  
美術室裏のびわを取ったときの再現。仕上げでは、色をブレンドして塗るのに気合いを入れた。

れるような気がする。

材料は、基本を板・針金・金網・紙粘土とした。その他、使えるものは何でもよいが、学校では用意できる限界があるので、学校にあるものは提供したが、それ以外は自分で用意させた。仕上げは各人の好みで絵の具でも、ブロンズの一色塗りでもよいことにした。実際、作業の遅い生徒は一色塗りのほうがかかる時間が少ないので、最後の段階での作業は早くなった。

題材のねらいは、以下の4つである。

- ①卒業式に向けての「気持ち」をつくりながら、毎日を大切に過ごす「気持ち」をつくる。
- ②自分が関わったいろいろな場面を思い出し、立体をイメージしてアイディアスケッチを描けるようにする。
- ③素材の特長を生かして作品を制作させる。
- ④自分や友達の思いを作品からよみ取り、自分も他人も大事にする心情を育てる。

## 2. 学習の展開

- ①立体作品のつくり方を知る。…0.5時間
- ②3年間の振り返り、「思い出に残る場面」を思い出す。その中で、一番印象に残っている場面の一つを選び、それを立体でどう現すかをイメージして、いろいろな角度からアイディアスケッチをする。…1時間
- ③土台である板に針金や金網で心棒をつくり打ち付ける。…0.5時間
- ④紙粘土で土台をつくり、骨組みしたものに肉付けをしたり、作品のパーツや「自分」を含む人物などをつくる。…5時間
- ⑤アクリルガッシュで着色し、ニス塗って仕上げる(あるいはブロンズカラーなどで一色塗りも可)。…2時間
- ⑥作品のよさや美しさを味わう。…1時間

## 3. 「自分」を見つめる

生徒一人ひとりがどんな思い出を心に持って卒業していくのか、教師としては知りたいところである。文集でもわかるが、形でそれを表すとどうなるのか、また、小さい立体作品なら自分の家のどこか目につくところに置いておける。そんな気持ちがあり、どんな場面を生徒が「思い出の一場面」として捉えるのが楽しみであった。結果は、修学旅行・体育祭・部活動やクラブチームで勝った喜びの場面、練習している風景、美術室で絵を描いている風景、掃除をしている場面、自分の机に立つ場面、友と話す場面など様々であった。

必ず「自分」を入れることという条件であったから、いろいろな大きさで「自分」が画面の中に取り込まれていた。「自分」は美術の作品づくりの中で、3年間を通して、主たるテーマであった。作品づくりを通して、常に「自分」を見つめさせ、自分も他人も大事にできる心情を育ててきた。画面の中に「自分」がいるときもあつたし、画面の中に「自分」を取り込まないときもあつたが、作品づくりとは「自分」を見ることだと気付かせてきた。「自分」を大切にすると同様に、他人を尊重し、他人の作品も自分の作品も大事にする気持ちを育ててきたつもりである。

幸いにも、生徒たちは誰の作品にも敬意を表し、大切に扱うことができている。学校が小さいということもあり、つくりかけの作品は常に美術室の片隅に置き、途中の段階も一目瞭然わかるように並べているが、故意に作品を壊すようなことは全くない。これはうれしいことである。

## 4. 授業を効率的に

授業のネックになるのは常に時間である。週1時間の中でどれだけ充実した作品づくりができるか(一刻も早く持って帰って家族に見せたい作品ができるか)である。生徒の集中度を高めスムーズに作業できる指導をすればよいのであるが、なかなか難しい。

題材では、まず、先に述べたように作品の床面積を小さくすることにした。仕上げの塗装も大きく二つに分け、比較的時間はかかるがカラフルで



「部長、最後のサーブ」生徒作品  
サーブの瞬間を表すために、針金を利用して卓球玉を浮かせた。自分らしさを出すために眼鏡をかけさせた。得点係と応援の人を入れた。ブロンズで重量感が出た。

より色を楽しめるアクリルガッシュでの着彩と、速やかにできるブロンズカラーなどを使った着彩と二つから選択させた。また、接着剤も木工用接着剤とエポキシ系接着剤を用意し、作品の状況に合わせて使い分けさせた。

そして、常に、つくりかけの作品を見られるように美術室の片隅に並べた。各普通教室で英語や数学の授業をし、10分間の休み時間に今度は気持ちを切り替えて、美術の授業に取り組むのである。10分の休み時間が大切である。休み時間をウォーミングアップの時間と考え、イメージの広がる環境づくりに努めてきた。

授業の導入もプレゼンテーションソフトを使い、パソコンで映像を中心に見せることで感覚的にすばやく理解させるようにした。美術こそ、映像で導入し、映像で説明ができれば、こと細かく口で説明するよりもずっと効果的である。たくさんしたことばより、一つの画像である。

## 5. 終わりに

まもなく卒業である。夏休み明けから徐々に準備し、作品をつくることで心構えもつくってきた。自分も大切に、また他人も大切に、そして自分の人生を慈しみながら、一步一步大地を踏みしめて生きていってほしい。自分を支えてくれた周りの人たちにも感謝の気落ちを持って巣立ってほしい。そんな思いが作品づくりを通して、生徒に伝わったらいいと思う。(かわしま よしこ)

## 「露天風呂でこんにやく問答」

カボチャドキヤ国立美術館館長 トーナス・カボチャラダムス

賢明なる読者諸兄！

まことにおめでたいことである。カボチャドキヤ民主主義人民共和国国立公園『びっくり山』が、世界遺産に指定されたのである。

びっくり山は、世界唯一のかぼちゃ型複式火山である。古くから天下の奇景として名高く、「びっくり山を見ないで、びっくりしたと言いな」と言われたのである。

活火山であるから、火口からもくもく煙を吐いている。ひろびろとしたカルデラには温泉が湧き、世界最大の空中露天風呂になっているのである。湯は熱く、万病に効く。大空の真只中で、地球の荒い鼻息を見上げながら、地球の体液に身を浸すと、疲れも汚れも癒されて、体にも心にも無垢の力が漲ってくるのである。

故種村季弘先生もご満悦である。

「絶景かにゃ、絶景かにゃ。羽衣盗られた天女さにゃがら、エミちゃんサトちゃんが裸で戯れているにょを見てると、下半身にも無垢の力がむくむくと漲ってくるよ」

「先生！ 何ちゅうことを。先生は下品な物質界を離脱して、清浄な精神界に住んでおられるのではありませんか。ビールを飲みたいとか、ふぐを食いたいとか、あそこが硬くなるとか、下品な欲求ばかりではありませんか？」



「びっくり公園」

「食欲や性欲が、にゃぜ下品にゃによですか？ 生命という目的に即して、自然が用意したもによが下品にゃら、生命そによもによが下品だということににゃりませんか？」

「先生は肉体を離脱しておられるのだから、生命とは無関係でしょう」

「肉体とともに生命も消滅するによですか？ では、生命とはにゃんでしょう？」

「エネルギーですね」

「エネルギーは不滅です。物質はエネルギーによ固まりです。肉体という物質が消滅することは、エネルギー、すにゃわち生命に変換することを意味しませんか？」

「肉体のないところに、生命があるのですか？」

「生命は霊魂です。霊魂とは、宇宙に偏在するエネルギーで、質量も体積もにゃい。僕はいま、そういう存在にゃによですよ」

「プラトンの説では、霊魂はイデア界(あらゆるものもの姿の世界)に住んでいて、下界に降りてきて肉体に宿る。霊魂によ住むイデア界が実在によ世界で、人間によ住む現象界はイデア界によ反映でしかにゃい」

「つまり、この世の現象としてあるものが、イデア界では実在する。イデア界には、ビールもふぐも存在していて、われわれの飲み食いするビールやふぐは、その反映でしかない。種村先生の飲み食いするビールやふぐは本物で、我々のはスクリーンに映った幻のようなものなんですかね？」

「ビールやふぐは同じにゃんですよ。それ自体は実在しているともいにゃいとみえにゃい。飲み食いする者の在り方によって、実在が不在に、不在が実在ににゃったりするによですよ」

「まるで量子力学(原子や素粒子などの微視的なものの物理法則を扱った力学の理論)ですね」

「霊魂は偏在する量子エネルギーだと言ったでしょう。どう？ 分かりましたか？」(つづく)

## 志太美術教育の流れとともに

元志太美術教育連盟会長 寺川 百合子

小学校高学年から中学生のころ、私は毎年春秋2回の志太・榛原地区写生大会へ出掛けて、一日たっぷり対象と向かい合い好きな絵を描いた。汽車やバスに乗って、大勢の友達と引率されて各地へ出向いて行った記憶は、50年の余を経た今も強烈な印象を残している。

写生大会は昭和28年から昭和41年まで、実に26回も続けられた、志太美術教育連盟(以下志太美連)の事業の一環であった。児童・生徒の動員数は毎年数千人。第10回の大井川の飛行場で開催されたときは7000人を越したというから、当時、志太地区を基盤とした描画への情熱がいかに高まっていたか伺い知れるというものである。私が絵が好きになった根もこの辺にあるかと思われる。

さて、この志太美連の設立は、昭和26年5月。発足以来一貫して「創造力のある豊かな人間性の育成」を基本方針としてきた。55周年を迎える本年においてもなお、現学習指導要領の根本的な趣旨と同じ道にあることは、図画工作・美術科で豊かな人間性の育成に着眼し、長い間苦勞して仕事をしてきた教師たちにとっては感慨深いことである。

## 〈三つの活動要素〉

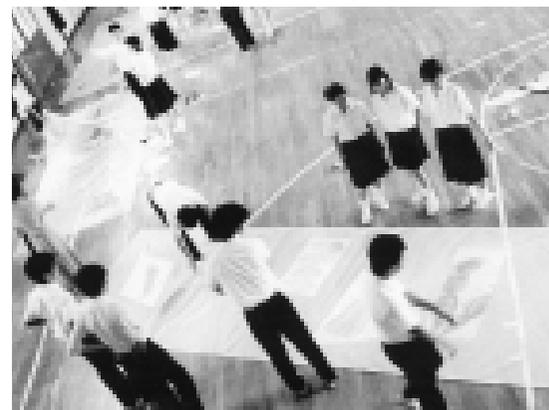
第一は、授業研究を中心とした研究活動。

第二は、子ども写生大会の実施(前述)。

第三は、教師の資質向上を目指す研修活動。

第一の授業研究を中心とした研修では、研究委託による研究発表会が中心に行われた。第1回の志太地区図工美術研究大会は、昭和32年に「農村の図工教育をどう進めたらよいか」をテーマに、静岡大学の松岡圭三郎教授、お茶の水女子大学附属中学校の熊本高工先生を講師に迎えて、大井川南小学校を会場として行った。以来、焼津・島田・藤枝地区で会場を持ち回り、平成5年焼津市立豊田小学校の発表会まで28回続けられた。

第三の教師の資質向上を願う研修活動では、実技講習会、ワークショップでの宿泊研修、県・中央の美術展出品、小グループでの研修、スケッチ旅行等々を実施してきた。また、美連の指定研修



授業研究での活動の様子

を受けたことをきっかけにして、各種教育美術展へ出品したことの成果も特筆すべき点が多い。

次に、志太美連の特色として、幼・小・中の一貫教育の重要性をいち早く認識し発足以来一体として美術教育に取り組んできたことが挙げられる。美術教育の隆盛を誇った昭和60年頃にかけては各地区で積極的に連携して、それぞれの特性を生かした研究が進められた。静岡県美術教育連盟研究大会や西日本大会、全国造形教育研究大会へ、時の志太美連から授業者を複数送り出した。学校のレベルアップを図り、指導技術の向上を狙って志太一円が大きく渦巻いていた時代であった。

やがて、時代の流れとともに、教育界の組織が整理され、志太地区においても教育協議会が設立された。各地区には教育研究会があり、その中で各教科領域などの研究部門が活動している。

志太美連も大きな転換期を迎え、今後どうあるべきかという問題に突き当たった。そんな中で、高い水準と長い伝統をもつ志太美連は、教育協議会と柱を別立てにした活動拠点として再生し、志太地区内の保・幼・小・中学校の教職員の自主研究サークルとして歩み始めている。校種間の枠を越えて多様な造形活動の振興を図るとともに、志太地区美術教育の発展、向上に努めることを目指して燈を点し続けている。(てらかわ ゆりこ)